分かると快感！

Z会ナビ

算数　理科　▶社会

お題　富士山大噴火に江戸幕府はどう対応した？

（2021年　東京大学　日本史）

おうちで楽しく！
プログラミング通信講座、Z会にて開講中！

Z会　KOOV　検索

次の文章は、江戸時代前半に起きた富士山の大噴火の際の江戸幕府の対応について説明したものです。これを読んで、被災地の救済に幕府がどのような方針で対応し、どのような問題があったのかを説明しなさい。

（1）1707年に富士山が大噴火して広範囲に砂（火山灰）が降り、砂はさらに川に流れ込んで大きな被害をもたらした。幕府は、川の砂を除く担当者を任命するとともに、「近年出費がかさんでおり、砂が積もった村々の救済も必要」として、全国の村々に対し村の財政規模に応じた税を課し、復興のための基金として徴収した。
（2）豊かな足柄平野を潤す酒匂川では、上流から砂が流れ込んで堆積し、氾濫の危険性が高まっていた。幕府は他の地域の大名にも費用を分担させ、最も危険な箇所を補強する工事を緊急に行ったが、砂の除去が不十分で堤防が切れ、下流域で洪水が繰り返された。
（3）砂が最も深く積もったのは、酒匂川上流の冷涼な富士山麓の村々であった。砂を取り除くためには莫大な費用が必要とされたが、幕府からの費用の支援はわずかだったため、一部の田畑を潰して砂を捨てていた。後には砂を流す水路の開削費用が支給されるようになったものの、捨てた砂は酒匂川に流れ込み、下流部に堆積してしまった。
（4）幕府に上納された約49万両の復興のための基金のうち、被災地の救済に使われたことがはっきりしているのは６万両ほどにすぎなかった。その６万両の大半は酒匂川の工事にあてられた。

今回は江戸時代前半に起きた富士山の大噴火に関する問題です。1707年のこの大噴火は「宝永大噴火」とも呼ばれ、記録が残っている富士山の噴火のなかでは最大規模のものであり、2021年４月現在最も新しい噴火です。今回はこの噴火の際の江戸幕府の対応について、見ていきましょう。

イラスト・瑞木匠

宝永大噴火とは

宝永大噴火は溶岩流が流れ出るのではなく、岩石や火山灰などを噴煙とともに噴き出すような噴火でした。これにより富士山付近には高温の岩石が降り、建物が焼失・倒壊し、降り積もった火山灰により、多くの田畑が耕作できなくなってしまいました。問題文に出てくる酒匂川は、富士山麓から現在の神奈川県西部を流れる川です。火山灰は江戸の市中にも降りました。大量の火山灰で江戸の街では昼間でも暗く、明かりをともさねばならないほどだったようです。

幕府はなぜ平野部復興を優先した？

この大災害に江戸幕府はどのように対応したのでしょうか。噴火当時は五代将軍徳川綱吉の時代です。江戸幕府は、徳川家が持つ領地からの年貢や金山・銀山からの収入を主な財源としていましたが、このころには金銀の採掘量が減っていました。さらに、1657年に「明暦の大火」という江戸の大部分が被害を受けた大火事が発生し、江戸の復興に莫大な費用がかかっていました。（1）の文章に「近年出費がかさんでおり」とあるのはそのためです。大噴火の対応に充てる財源が乏しかった幕府は、（1）にあるように全国から復興に充てるための税をとりたてました。

幕府は全国から集めた資金も使って噴火の対応を行いますが、（2）の酒匂川流域の平野部では幕府と大名が協力して工事にあたったのに対し、（3）の富士山麓の村々には当初幕府の支援がわずかだったとされています。当時の幕府の重要な財源は年貢＝米です。（2）と（3）の違いを比較すると、米の収穫に向いていて幕府の財源に貢献しやすい平野部の復興を、米の収穫に向いていない山麓部よりも優先して行っていたと考えられます。のちになって、山麓部の砂を流す水路の開削費用を支援していますが、その結果酒匂川に砂が流れ込み、川の下流部に砂が堆積し、氾濫・洪水の原因となってしまいました。山麓部と平野部の関係性を考えないまま、場当たり的に対応を行ったことで、結果として復興を遅らせてしまったと考えられます。また、（4）にある通り、噴火の復興のためにとりたてた税のうち、復興に使われたのはわずかで、大半は幕府財政の立て直しなど、別の用途に使われてしまいました。このようなこともあり、酒匂川流域が復興したのは、宝永大噴火から40年ほどを経てからのことでした。　（Z会・河原井彩）

今回の教訓

大災害が起きた際には、建物の焼失や倒壊などの直接的な被害のほか、地域住民の生活や、農業などの生産活動への長期的な影響にも気を配りながら、復興のための施策を行うことが必要です。

河原井彩さん　2007年に入社。中学生向け社会、高校生向け日本史教材の編集を経て、現在は幼児向け教材を担当。新潟県生まれの埼玉県育ち。